社会でうまれ、社会をうみだす力

『集合的創造性』解

京都大学文学研究科　鈴木赳生

「集合的創造」？: 評者の問い（期待）

- 創造＝あたらしいなにか（アイディア、価値、社会状況、etc.）を生みだすこと
- 本書の基本構想: 「集合的創造」

＝創造とは個人ただひとりによってなされるのではなく、社会文化的な文脈における個と集合の往還から生じる。（序章）

- Q1: もうすこし立ち入った概念化はなされているか？
- Q2: 創造の力はどのように描かれているか？

- 以下、これらふたつの問いに対し、本書から答えを引きだす *

（＊本書に依拠するものの、評者なりの読み替え・読み込みにもとづく）

Q1: 創造の社会性

- 創造の社会性

  極1: 完全な個的創造?　　ex. ひとり撮りつづけた写真家→死後発見（Vivian Maier）

  極2: 完全な集合的創造?　ex. ~collectiveの匿名的活動→個性があらわれる

  →創造において個の次元と集合の次元は交錯＝つまりは**社会性**を帯びる

しかし、「集合的」であれ「社会的」であれそれのみでは不定形で、概念として限定が不十分。実際の分析には、もうすこしこまやかな概念化が必要。

- 評者のアイディア＝<u>創造がなされる社会的な諸形式を区別</u>

  （創造の社会性をいくつかの水準で区分け）

A1: 「集合的創造」の諸形式（1~2章、概念から）

- 集団性＝一定のメンバーからなる集団による創造（1章 pp.47-8）

  ex. エジソンらの科学者集団による発明

- 共同性＝社会文化的な文脈（環境や歴史）のなかでなされる創造（1章 pp. 48-50）

  ex. 発明をささえた科学知の継承、科学文化、資本の蓄積、etc.

- 連関性＝「異なる類や種、事物を横断する外在的な関係」（p. 66）のなかでなされる創造（pp. 64-7）

  ex. 竹 - フィラメント - 電気 / 京都府八幡 - アメリカ・ニュージャージー

A1:「集合的創造」の諸形式（3~10章、事例から）

- 共同性

　7章（離島の内発的発展）：地域にすでにある生活共同体（コミューン）を生産共同体（アソシエーション）へと再創造し、資本主義経済の巨大な力に応じる。

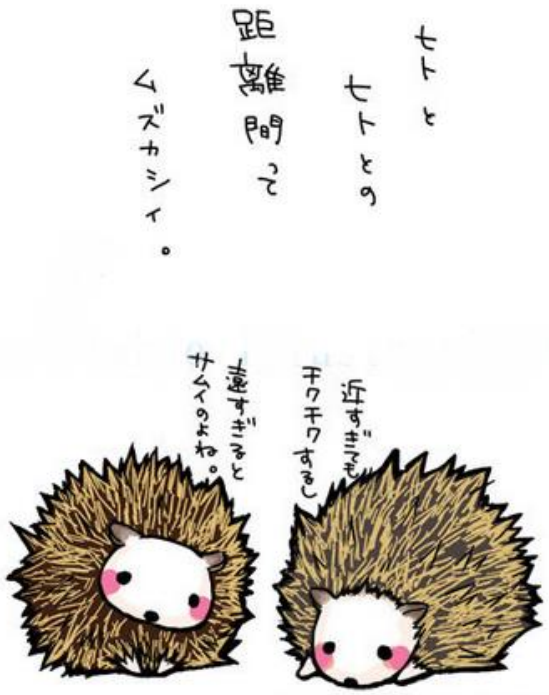
- 連関性

　5章（北海道の木彫り）：先住民 - 入植者の連関からうみだされてきた木彫り

　6章（カンポグランデのsobá）：沖縄ルーツのエスニック諸集団が交流するなかであらたな食文化（sobá）がうまれ、諸集団をむすびつけるようになった。

　9章（朝鮮学校生徒たちの言語実践）：既存の排他的な共同体カテゴリ（コリアン／日本人）に沿った教育vs.より自由な在日コリアンの生　→二言語のあらたな連関（舞台にあわせた演技）によって、この「矛盾と共に歩む道」（p. 231）。

Q2: 創造の力動性



- 力としての創造

  創造の社会性を強調することのあやうさ

  ＝逆に**個性の発露**や、**社会創造の力学**を見失う

- ex. 波立たない共同性（「集合的主体」）の先取り（序章 pp. 18-20）

  …これに対して、依存・接続とは異なるコンヴィヴィアリティ論の力点

  ＝「ヤマアラシのコンヴィヴィアリティ」（Nyamnjoh [2015] 2017: 10-5）

  ＝針を伸ばし自律を求めながらも、寒さをしのぐため近寄り依存せざるを得ない、

  だがあまり近づくと痛い、しかし……

  ＝あらたにうみだされるものとしてのコンヴィヴィアリティ、個がせめぎあうなかで創造される社会

Q2: 創造の力動性

- 評者のアイディア
  接続のみでなく切断、依存のみでなく自律
  →**社会**＝この引力と斥力がせめぎあう「あいだ」に生じるもの
  →**創造**＝既存の社会のただなかでうまれ（創造の社会性）、
  あらたな社会をうみだす（社会の創造）

A2: 力動性を描く

- 個性の発露

　3章（サグラダ・ファミリア）：自然界の構造原理の解読・応用をいかにおこなうか、このhowの過程に個の創造性が発揮される。（pp. 99-100）

　4章（太極拳の推手）：所与の型の身体化ではなく、個々に異なる身体の動きに応じる即興能力をともに研鑽していく。（pp. 118-20）

A2: 力動性を描く

- 社会の創造

　8章（中米からの移民）：「移動の大河」（p. 209）のなかでじわりと感じられてきた共同性の予感が、移民実践のなかであらたな「われわれ」として具現化・（再）創造され意味づけられていく。

　10章（女性野宿者の性を売る「選択」）：貧困のなかで性を売る行為はその時々の機会に応じ、中動的に（國分 2017）なされる　→支援によるあらたな社会状況の創造（生活の変化）は、構造的被害者／主体的選択者の二分法のあてはめではなく、この見通しえない状況とつきあうなかで偶発的にうまれる。

参照

- https://livedoor.blogimg.jp/angelmomorin/imgs/6/9/69247fc4.png（2021年3月18日最終閲覧）
- 國分功一郎，2017，『中動態の世界 意志と責任の考古学』医学書院.
- Nyamnjoh, Francis B., [2015] 2017, “Incompleteness: Frontier Africa and the Currency of Conviviality,” *Journal of Asian and African Studies*, 52(3): 1-18.（楠和樹・松田素二抄訳，2016，「フロンティアとしてのアフリカ、異種結節装置としてのコンヴィヴィアリティ―不完全性の社会理論に向けて」松田素二・平野（野元）美佐編『紛争をおさめる文化―不完全性とブリコラージュの実践』京都大学出版会，311-47.）